

## 新聞4コマ漫画が描く安倍晋三・福田康夫首相（中編）

両首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2006～2008

### Prime Ministers Shinzo Abe and Yasuo Fukuda in Newspaper Comic Strips (Part 2):

An Analysis of Comic Strips in the Three Major National Newspapers in Japan 2006-2008

水野 剛也

Takeya MIZUNO

福田 朋実

Tomomi FUKUDA

#### はじめに（前編の要約と中編のねらい）

本論文は、安倍晋三・福田康夫両首相の在任期間中（それぞれ、2006年9月26日～2007年9月26日、2007年9月26日～2008年9月24日）に3大全国紙（『毎日新聞』・『読売新聞』・『朝日新聞』）の社会面に掲載されたすべての4コマ漫画（朝刊・夕刊とも）を精査し、そのなかから首相を描いている作品を網羅的に抽出し、それらが各首相をどのように描いているかを主に質的に分析する試みである。

本誌前号（第47巻・第1号、2010年1月）に掲載した前編では、論文の目的・方法・意義・構成を説明した上で、量的な側面から全体像を俯瞰した。

本号に掲載する中編からいよいよ本題に入り、『毎日新聞』の「アサッテ君」（朝刊）と「ウチの場合は」（夕刊）そして『読売新聞』の「コボちゃん」（朝刊）を質的に分析する。本誌次号に掲載する予定の後編では、『朝日新聞』の「ののちゃん」（朝刊）と「地球防衛家のヒトビト」（夕刊）を同じ方法で分析した上で、結論として分析・知見を総括し、今後の研究課題や全体を通して得られる考察などを提示する。

#### 1 本論文の目的・方法・意義、および構成

本誌前号（前編）に掲載。

#### 2 量的な側面から見た全体的な傾向

本誌前号（前編）に掲載。

#### 3 新聞4コマ漫画が描く安倍・福田首相

本項では、安倍・福田首相を描いた作品を漫画ごとに質的に分析する。

#### ・アサッテ君（東海林さだお）『毎日新聞』（朝刊）

『毎日新聞』の朝刊で連載されている「アサッテ君」（東海林さだお）は、サラリーマン・朝手春男とその家族の庶民的な日常生活を、ときに時事問題にからめて描く漫画である。朝手家は6人家族で、

主人公・春男、妻・秋子、小学生の長男・夏夫、幼稚園児の長女・冬美、春男の両親・昼吉と夕子、からなる。作品の舞台となるのは主に彼らの家庭や職場である。連載を開始したのは1974年6月で、2003年11月に1万回を達成し、本論文執筆時点(2010年1月)でも1万2,100回を超えて継続中である。<sup>(10)</sup>

「モテない、カネない、度胸もない」主人公とは対照的に、作者の東海林さだお(本名・庄司禎雄)は活躍のめざましい漫画家である。1937年に東京都杉並区で生まれた東海林は、早稲田大学入学後から本格的に漫画を描きはじめ、大学を中退後、1967年に実質的なデビュー作である「新漫画文学全集」(『週刊漫画 TIMES』)の連載を手がけた。その他の代表作として、「タンマ君」(『週刊文春』)、「サラリーマン専科」(『週刊現代』)、「ショージ君」(『週刊漫画サンデー』)などがあり、食べ物に関するコラム「あれも食いたい これも食いたい」(『週刊朝日』)でも有名である。受賞(章)歴も多彩で、第16回文藝春秋漫画賞(1970年)、第11回講談社エッセイ賞(1995年)、第45回菊地寛賞(1997年)、紫綬褒章(2000年)などがある。2001年には「アサッテ君」で第30回日本漫画家協会賞大賞を受賞している。<sup>(11)</sup>

本論文の分析期間中、「アサッテ君」は安倍・福田首相とも複数の作品で描いており、差はあるものの必ず現役の首相を題材としていることがわかる。安倍は337本中8本(2.37%)、福田は335本中2本(0.59%)の作品で描いており、どちらも「地球防衛家のヒトビト」(『朝日新聞』夕刊)につぐ本数・頻度である。両首相とも複数の作品で描いているのは、本論文が分析対象とした漫画のなかでは、「アサッテ君」と「地球防衛家のヒトビト」だけであった。<sup>(12)</sup>

一定数の作品で必ず首相を取りあげるという特徴は、少なくとも小泉政権時から継続して見られる。小泉を描いた作品数も1,825本中16本(0.87%)と「地球防衛家のヒトビト」(1,320本中41本、3.10%)について多く、5年5ヵ月の在任期間を通してほぼ毎年、掲載されていた。2006年だけ小泉を描いた作品がなかったが、9月に就任した安倍首相を同年中に2本の作品に登場させている。回数や頻度に多少の変動はあっても、「アサッテ君」が首相を描くことはある程度定着しているといえる。

なお、3人の首相を比べると、安倍の頻出ぶりが目立つ。頻度で比較すると、安倍の2.37%に対し、小泉が0.87%、福田は0.59%であった。とくに、安倍と福田の差は歴然としている。在任期間がほぼ同じ1年であるため本数で比較すると、安倍の8本に対し、福田はわずか2本にとどまる。この傾向は3大紙の4コマ漫画全体でも認められるが(安倍=20本、福田=11本)とくに「アサッテ君」では安倍は題材になりやすく、福田は題材になりにくかったことがわかる。また、比較的支援率が高く、マス・メディアへの露出も多かった小泉の3倍近い頻度で安倍を描いている点からも、「アサッテ君」と安倍の「相性のよさ」が裏づけられる。

次に、安倍・福田を描いた作品の質的な分析に移るが、そこで参考になるのは、小泉の作品を分析した先行研究(前編・後注3参照)である。それによれば、「アサッテ君」は主に次の3つのパターンで小泉を描いていた。

- 1 現実の政治問題に関連させて首相を登場させるが、最終的には、家庭内の些事など首相や政治問題とは無関係なオチやシャレに帰結させる。
- 2 上のパターンと同じく政治とは無関係なオチやシャレにつなげるために首相を登場させるが、そこで示される首相の言動は現実のものでさえなく、作者がつくりだしたフィクションである。
- 3 主人公一家をはじめ一般庶民に皮肉っぽく首相を語らせる。政治色がほとんどない上の2パターンとは本質的に異なり、政治的な批評性・風刺性が認められる。

これらのパターンは、基本的に安倍・福田を描いた作品にもあてはまる。以下では、上の3類型に準

拠して分析をすすめる。

まず、安倍を描いた8本のうち3本は第1のパターン、つまり、現実の政治問題に関連させて首相を登場させるが、最後には非政治的なオチやシャレに帰結させる作品であった。首相就任後はじめて描いた2006年9月29日号の作品（No.10981、図1）はその典型例で、次のような内容である。

- ・安倍内閣について報じる新聞を読みながら春男が、「再チャレンジとか少子化とか」「目新しいのが増えたね」というと（1~2コマ）
- ・秋子が、「そんなのあたしなんかずっと前からやってたわ」と主張し（3コマ）
- ・ハンバーグに使ったひき肉の残りを餃子にも使う「再チャレンジ相」だと胸を張る（4コマ）

発足したばかりの安倍内閣のスローガン「再チャレンジ」を、家庭料理の食材の2次利用になぞらえ、非政治的なオチにつなげている。

もう一例、2007年9月13日号の作品（No.11303、図2）も、政治性のほとんどない第1のパターンで首相を描いている。

- ・新聞の1面トップ記事が、安倍首相の「職を賭す」という発言を伝えている（1コマ）
- ・春男が職場の同僚に、「ウチの女房も」「ハンドバッグ買ってくれなきゃ食を賭すといってるんだ」と愚痴をこぼす（2~3コマ）
- ・「食を賭す？」と尋ねる同僚に春男が、「めっちゃめっちゃに食べてめっちゃめっちゃに太ってやる」という意味だと説明する（3~4コマ）

この作品は冒頭で、インド洋での自衛隊の給油活動継続に「職を賭す」という首相の実際の発言（9月8日）を示しているが、最後はそれとまったく無関係な家庭的なオチで終わっている。なお、安倍はこの発言のわずか4日後の9月12日、首相を辞任することを突然に表明した。<sup>(13)</sup>

非政治的なオチやシャレにつなげるこの描き方は「アサッテ君」がもっとも得意とするパターンで、本論文の定義には合致しないものの、同じ方法で安倍を題材にしている作品は他にもいくつかある。その1つ、首相就任以前の2006年5月29日号（No.10878）の作品は、自民党の次期総裁候補者として安倍と福田を登場させ、両候補者の一本化という政治問題を、春男の昼食の一本化（そばとカレーのセットを注文）になぞらえている。もう一例、2006年10月13日号（No.10994）の作品は、安倍の著書『美しい国へ』（文春新書、2006年）を読んだ秋子が「美しい顔へ」という美容整形の看板を見てほほえむ、という内容



図1. 2006年9月29日号 (No.10981)

図2. 2007年9月13日号 (No.11303)

である。『美しい国へ』は「美しい顔へ」という非政治的なシャレのために使われているにすぎない。なお、この作品には安倍首相の名前も役職も身体も描かれていないため、首相在任期間内ではあるが本論文が定義する「首相を描いている作品」には含めることができなかった。<sup>(14)</sup>

第2のパターンは、非政治的なオチやシャレのために首相を登場させるが、そこで描かれる首相の言動は作者がつくりだしたフィクションだというものであるが、これに合致する作品は安倍を描いた8本のうち1本しかなかった。2007年8月8日号の作品 (No.11286、図3) がそれで、居酒屋で安倍が「板わさ」(かまぼこにわさびを添えた小料理)を注文しようとするが、板から切り離されるかまぼこを想像し、それが自身の「降板」(4コマ)を連想させるため注文を取りやめる、という内容である。

居酒屋で独り酒を飲もうとする安倍は作者が想像で描いているため、第2のパターンに分類できるが、留意すべきは、「降板を恐れる首相」は政治的な批評性・風刺性を多分に含んでおり、後述する第3のパターンの特徴も十分に認められるということである。しかし、新聞4コマ漫画ではきわめてめずらしく、この作品には主要登場人物である朝手家の人々が一切登場せず、終始、首相だけが単独で描かれている。そのため、本論文では便宜的に第3ではなく第2のパターンとして扱った。作品中の登場人物が首相1人だけなのは、本論文が分析対象とした全作品(他の4コマ漫画も含む)のなかでこの1本だけであった。

上述の論点について付言すると、フィクショナルな舞台設定で首相を滑稽に描く手法は1コマの政治風刺漫画でよく見られるパターンであり、そこに1コマと4コマ漫画との関連性を見いだすことができるかもしれない。「アサッテ君」では後述する図5も同類であるし、本論文の後編(本誌次号掲載予定)で分析する『朝日新聞』(夕刊)の「地球防衛家のヒトビト」にも同じ傾向の作品がいくつか見られる。首相をはじめ政治家を風刺する場合には、新聞4コマ漫画と1コマ漫画は類似した性質を有することがあるようである。この点のさらなる検証も、今後の研究課題の1つである。

次に、主人公一家をはじめ一般庶民に皮肉っぽく首相を語らせる第3のパターンには、安倍を描いた8本のうち2本が該当した。最初の1本は2007年8月3日号の作品 (No.11281、図4) で、次のような内容である。

- ・「まだ投げる」と続投の意思表示をする安倍首相をテレビで見た春男が、「つまり投げないということだな」といって、秋子が「ハア？」と首をかしげる(1~3コマ)
- ・春男が「だから政権の座は投げないと」という意味だと説明すると、秋子も苦笑しながら納得する(4コマ)



図3. 2007年8月8日号 (No.11286)


図4. 2007年8月3日号 (No.11281)

安倍はこのとき、年金問題、あいつぐ閣僚の不祥事や辞任、参院選での自民党の大敗などに見舞われ、最高政治指導者としての責任をきびしく問われていた。参院選が執行された7月29日に続投（「投げる」）を表明したが、春男はそれを「投げない」（4コマ）、つまり首相の座に執着するものと解釈し、皮肉っている。第2のパターンに分類した図3とあわせて読めば、作者が首相職にとどまりつづける安倍を風刺していることがよくわかる。

第3のパターンに入るもう1本は2007年9月16日号の作品（No.11306、図5）であるが、これは第2のパターンの要素を多分に含みながら政治風刺をしている点で特徴的である。

- ・安倍首相が記者会見で「辞めた本当の理由を教えてください」と追及される（1～2コマ）
- ・安倍はついに意を決し、「ほんとにほんとにいいの？」と沈黙を破る（3コマ）
- ・「だってみんながいじめるんだもーん」と安倍が泣きだす（4コマ）
- ・以上は春男の想像で、苦笑しながら「てのがほんとじゃないの」とのべる（4コマ）

架空の首相が子どものように泣きだす点だけを見れば第2のパターンに入るが、最後のコマで春男が登場し、首相の辞任について皮肉っぽく論評していることから、第3のパターンに分類した。前述した図3・4とともに、数々の問題をかかえ辞任に追い込まれた首相を風刺している。

最後に、3つのパターンのどれにも合致しなかった2本の作品を紹介する。1つは2007年4月20日号（No.11178）の作品で、大リーグの松坂大輔投手のファンがサイコロの絵とアルファベットの「K」（ダイス・ケ）を掲げて応援していることを受けて、春男がハート・マーク「」で安倍「晋三」（心臓）をあらわす、という内容である。たわいのないシャレという点では第1のパターンに限りなく近い。もう1本は2007年9月17日号（No.11307）の作品で、昼吉とその友人が「自分より年下の総理大臣が初めて出てきたとき」に老人になったことを自覚する、という内容である。この作品が掲載される直前に図2と図5が描かれていることから、「自分より年下の総理大臣」が安倍をさすことは明らかであるが、非政治的なオチやシャレにつなげているわけではないし、政治的な批評・風刺をしているとも解釈できないため、いずれのパターンにも含めることができなかった。

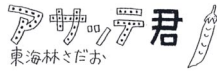
次に、福田を描いた2本の分析に移ると、いずれも庶民が皮肉っぽく首相を語る第3のパターンに分類できる。その1つ、2008年9月5日号の作品（No.11632、図6）は、次のような内容である。

- ・相撲のテレビ中継で、「ただいまの決まり手送り出し！」とアナウンスされる（1～2コマ）



図5. 2007年9月16日号  
（No.11306）

図6. 2008年9月5日号  
（No.11632）



(11635)



図7. 2008年9月8日号  
(No.11635)

・「このたび辞任を決意しました」と発言する福田首相をテレビで見た春男が、「ただいまの決まり手」「投げ出し！」と評論する(3~4コマ)

突然の辞任表明を相撲の決まり手になぞらえ、政権を「投げ出し」(4コマ)たと批判されていた福田を皮肉っている。ダジャレではあるが、風刺性がある点で非政治的な第1のパターンとは明らかに異なる。福田が辞任を表明したのは、この作品が掲載される4日前の9月1日であった。

もう一つはその3日後に掲載された2008年9月8日号の作品(No.11635、図7)で、サジをわたしても「ポイ」(2~3コマ)とすぐ投げてしまう子どもを秋子が「首相の資質があるわ」(4コマ)とほめる、という内容である。図6と同じく、この作品も突然「サジを投げ」(4コマ)た福田を風刺しており、第3のパターンに該当する。これら2本の作品が掲載されるまで、つまり、辞任を表明するまで、「アサッテ君」で福田が描かれることはなかった。

なお、福田の突然の辞任はその後3本の作品で題材とされており、いずれも本論文の定義には合致しないものの、「アサッテ君」における福田の描写がいかにかつてに辞任問題に集中しているかがわかる。その一つ、2008年9月12日号(No.11639)の作品は、激しく口論する秋子に春男が「うちの妻はやかましいから」と発言すると、秋子に「わたしは物事を客観的に見ることができるんです」「あなたとはちがうんです」と反論され、春男が「何もいえねー」と

つつむく、という内容である。それぞれの台詞は実際にあった話題の発言にそったもので、「やかましい」は太田誠一農林水産相の問題発言、秋子の反論は福田の辞任会見での発言、最後は北京オリンピックで金メダルを獲得した水泳・北島康介選手の言葉をあらわしている。本論文の定義には合致しないが、会見で声を荒げた首相を皮肉った作品だといえる。同じく定義には合致しないが、2008年9月15日号(No.11642)と2008年9月27日号(No.11653)の作品も1年あまりで辞任を決めた首相を風刺している。「アサッテ君」に描かれる福田首相は、簡単に職務を放棄した無責任な政治家でしかない。

以上の分析をふまえて安倍・福田政権時の「アサッテ君」を総括すると、非政治的なオチやシャレにまとめる第1のパターンを得意としている点は相変わらずであるが、それ以上に、第2・3のパターンで政治的な批評・風刺を含ませる作品の存在感が増しているといえる。小泉政権時にも緩やかに首相を皮肉る作品はあったが(16本中4本)、先行研究も指摘しているように、「多くは政治色を強く示さず、単に漫画を成立させるオチやシャレの題材として首相を登場させる傾向が強」かった。小泉につづく2人の首相が連続して1年ほどで首相職を「投げ出した」ことが、首相の描き方に政治的な批評性・風刺性を付加したといえるかもしれない。

上述の点をさらにもう一步すすめれば、時事性が強い「アサッテ君」は、話題になっている政治問題や首相の言動を積極的に扱うがゆえに、世論と運動して首相の描き方に相当な柔軟性・可変性があると考えることもできる。先行研究は、「アサッテ君」を「世論反映型」の「時事的4コマ漫画」と特徴づけ、こう論じている。「社会で話題となっている事象を積極的に取りあげているという意味で時事性が強く、世相を敏感に反映している点も『アサッテ君』の特徴として無視できない」。安倍・福田を政治的に批評・風刺する作品が目立ったのも、日本社会にそうした庶民感情が広まっていたことのあるため、つまり批判的な世論を敏感に反映した結果だと推察することができる。

また、本論文だけで結論づけることはできないが、先行研究が示した3つの類型を修正する必要もあるかもしれない。少なくとも安倍・福田を描いた作品についていえば、政治的な批評・風刺の有無により大きく2パターンに分類し、さらに各パターンのなかで現実の言動とフィクションという要素で細分化する方法も有力である。前述した首相描写の柔軟性・可変性も含め、「アサッテ君」による首相描写の類型化も、さらなる事例研究を積みかさねて継続的に考究していく必要がある。

最後に、首相が新聞紙面やテレビ画面のなかに描かれることが多い点も、「アサッテ君」の特徴として看過できない。安倍を描いた8本のなかでは4本（新聞3本、テレビ1本）、福田を描いた2本のなかでは1本（テレビ）がそれにあたる。小泉を描いた16本では、新聞が7本、テレビが1本であった。新聞だけでなくテレビも含めて、マス・メディアが報道する首相を庶民が見る・語る、という構図が多用されていることがわかる。これは、後述する「ウチの場合は」や「コボちゃん」（『読売新聞』朝刊）をはじめ、本論文後編で分析する「地球防衛家のヒトビト」（『朝日新聞』夕刊）にも共通する新聞4コマ漫画全体に見られる注目すべき特徴であり、折に触れて指摘する。

#### ・ウチの場合は（森下裕美）『毎日新聞』（夕刊）

『毎日新聞』の夕刊で連載されている「ウチの場合は」（森下裕美）は、主人公一家である大門家の面々が家庭・学校・職場などでくり広げる日常生活を描いたきわめて家庭的な4コマ漫画である。大門家は、小学2年生のボク・ユウヤ、小学5年生の姉・アサカ、広告代理店に勤務する父・パン、優しくおっとりした母・キョウコの4人からなる。拾われてきた飼い犬のモアもいる。彼ら以外にも、近所のモモコやユウヤの担任の小坂先生、パンの同僚や上司の部長など、さまざまな人物が登場する。2001年6月に休止した「まっぴら君」（加藤芳郎）を引き継ぎ2002年1月4日号から連載を開始し、本論文執筆時点（2010年1月）でも2,200回を超えて継続中である。<sup>(15)</sup>

作者の森下裕美は、本論文が分析対象とする漫画家のなかでもっとも若く、新聞4コマ漫画以外でも広く活躍している漫画家である。1962年に奈良県でうまれた森下は、1982年に「英語教師」で第6回ヤングジャンプ青年漫画大賞に準入選し、同年、「少年」（『月刊漫画ガロ』）でデビューした。同じ年に『週刊少年ジャンプ』でも「JUN」を連載し、その後は4コマ漫画を中心に活躍するが、最近では『大阪ハムレット』（双葉社、2006～09年、2009年に映画化）や『夜、海へ還るバス』（双葉社、2008年）など、家族を主題としたストーリー漫画にも取り組むようになった。「ウチの場合は」は、作者にとってはじめての新聞連載漫画である。その他の代表作に「少年アシベ」（『週刊ヤングジャンプ』、1991年にアニメ化）主な受賞歴として、第21回日本漫画家協会賞優秀賞（1992年）、第10回文化庁メディア芸術祭優秀賞（2006年）、第11回手塚治虫文化賞短編賞（2007年）などがある。<sup>(16)</sup>

本論文の分析期間中、「ウチの場合は」が首相を描いたのは安倍の1本（245本中1本＝0.40%）だけであった。福田の在任期間を含めた頻度は0.19%（525本中1本）で、これは安倍・福田政権時を通じて1度も描かなかった「ののちゃん」（709本中0本）と1度だけ福田を描いた「コボちゃん」（711本中1本＝0.14%）につぐ低さである。

政治家や政治問題をほとんど扱わないという特徴は、小泉政権時に連載を開始したときから変わっていない。小泉の在任期間中、「ウチの場合は」は1度も首相を描くことがなく（1,318本中0本）、そのため先行研究はこの漫画を「純家庭的4コマ漫画」と特徴づけている。連載開始から実に5年8ヵ月後にはじめて登場した首相が安倍だったわけである。

首相が初登場したその作品は2007年9月22日号（No.1562、図8）に掲載され、次のような内容で



図8. 2007年9月22日号  
(No.1562)

あつた。

- ・電車で騒ぐ女子学生を疎ましがる同僚をバンが、「はしが転んでもおかし  
い年頃」「かわいいじゃないか」となだめる(1~2コマ)
- ・別の若い女性が週刊誌の中吊り広告を見て、「あの中吊りチョーおかし  
くね?」「チョーうけるべ!」と騒ぎだす(3コマ)
- ・同僚があきれ顔で「"安倍自爆・ひきこもり 麻生クーデター" 政治に  
関心あるんですかね?」と尋ねると、バンが「だからなんでもおかし  
いんだ  
って」と答える(4コマ)

なお、「安倍自爆・ひきこもり 麻生クーデター」(4コマ)は、安倍の首相  
辞任をめぐる憶測に関する報道を表現したもので、週刊誌の中吊り広告に実  
際に書かれていた見出しから抜粋したものと考えられる。ところで、麻生太  
郎は安倍の次の次の首相となったが(2008年9月24日に就任、2009年9月16日  
に内閣全体で総辞職)、麻生の描かれ方もいずれ本論文と同じ方法で分析す  
る予定である。<sup>(17)</sup>

「ウチの場合は」に首相が登場した作品はこれ以外にないため、ただちに  
首相描写のパターンを見いだすことはできないが、政治色がきわめて希薄で  
ある点は1つの特徴だといえる。作品の主題は安倍や彼の辞任そのものでは

なく、それを伝える週刊誌の広告を見て騒ぐ迷惑な若い女性、および彼女らを疎んじる会社員である。何でもおもしろがる若い女性とそれを不可解に思う大人(とくに男性)というテーマは、日常的によく見られる価値観の相違を表現したもので特段めずらしくはない。この作品も、首相の辞任という重大な政治ニュースでさえも現代の若い女性は笑いの対象にしてしまう、というありふれた出来事を描写しているにすぎない。少なくとも、前述した「アサッテ君」のいくつかの作品のように、時事的な関心にもとづいて職務を放棄した政治家として首相を批評・風刺しているわけではない。

「ウチの場合は」が平凡な家族の日常生活を描く漫画であることは、作者の森下自身がくり返し認めており、首相を描いた作品に政治色がほとんどないことも何ら不思議ではない。連載直後のインタビューで漫画を描きはじめたきっかけを問われた森下は、「嫌な事件が多くて、悲しかった。子どものためにも描きたいなという気持ちが出てき[た]」と答えている。そして、「みんながちょっと優しい気持ちになってくれるといいなと思って、家族中心に話を描いています。それは『ウチの場合は』にも通じます」とつづけている。連載から1年後のインタビューでも、「みんなが経験しているような平凡な日常を描きたい」と語っている。そのような意図で描かれた漫画に、政治風刺的な文脈で首相が入り込む余地が少ないのは当然であろう。<sup>(18)</sup>

以上の知見から、先行研究も指摘しているように、「ウチの場合は」が政治性をほとんど含まない「純家庭的4コマ漫画」である点をあらためて確認することができる。後述する「コボちゃん」(『読売新聞』朝刊)と本論文後編で検討する「ののちゃん」(『朝日新聞』朝刊)にきわめて近い。逆に、同じ『毎日新聞』に掲載されている漫画でありながら、積極的に時事問題を扱い政治風刺を効かせることもある「アサッテ君」や「地球防衛家のヒトビト」(『朝日新聞』夕刊)とは対極に位置づけられる。

もっとも、政治や政治家とはほぼ無縁な「ウチの場合は」にたとえ1回でも安倍首相が登場している



事実は、安倍の辞任表明がいかに社会を驚かせたかを物語る。日ごろは政治家の話題などほとんどのばらない「ウチの場合は」の登場人物たちの世界でさえも、若い女性の笑いの種としてではあれ、突然の辞任表明による政界の混乱が社会問題として認知されているからである。

そこからさらに仮説を立てれば、「ウチの場合は」のような家庭的な漫画による首相描写には、首相の言動などにむけられる社会的注目度がとくに深く関係している、と考えることもできる。本論文は前編で、新聞4コマ漫画が首相を描く多寡に影響を与えるのは、支持率の数字そのものよりも、支持率が高いにせよ低いにせよ、どれだけ社会の注目を浴びているかである、という仮説を提示した。福田首相の辞任表明を1回だけ描いている「コボちゃん」についてもいえるが、この仮説は、日ごろ政治的なテーマを扱わない家庭漫画にとくに適合すると考えられる。もちろん、この仮説の検証もさらなる研究により取り組まれるべき将来の課題である。

最後に、マス・メディアが伝える首相を庶民が見る・語るという構図が「ウチの場合は」でも使われている点は見逃せない。「アサッテ君」の分析でも論じたように、新聞4コマ漫画では、新聞紙面やテレビ画面のなかに首相が描かれることが多い。「ウチの場合は」に描かれているのは電車内の週刊誌の中吊り広告であるが、マス・メディアの一種であることに変わりはない。首相自身が主人公になることが多い1コマ漫画とは違い、無名の市民が主人公である新聞4コマ漫画では、最高政治指導者である首相はあくまでマス・メディアを媒介して見知る存在として描かれるといえる。

#### ・コボちゃん（植田まさし）『読売新聞』（朝刊）

『読売新聞』の朝刊で1982年4月から連載されている「コボちゃん」（植田まさし）は、主人公一家の日常生活を描きわめて家庭的な4コマ漫画である。連載8,000回を機に、2004年12月1日号から全国紙の4コマ漫画としてはじめてカラー化され、本論文執筆時点（2010年1月）でも連載9,800回を超えて継続中である。

「コボちゃん」に登場する主要人物は、たんぽぽ幼稚園に通う5歳の主人公・コボ（田畑小穂）とその家族、父・耕二、母・早苗、祖父・山川岩男、祖母・山川ミネ、それに親戚の大森竹男である。飼い猫のミーと犬のポチもしばしば家族の一員のように登場する。「コボちゃん」は作者の幼少時代の愛称であるという。なお、2009年10月14日号に掲載された作品（No.9764）で早苗の妊娠が判明したことから、いずれコボの妹か弟が加わるはずである。

作者の植田まさし（本名・植田正通）は、とくにサラリーマンむけの4コマ漫画を得意とする漫画家で、その活躍ぶりは、「彼の作品が人気を博し、その結果として4コマ漫画専門雑誌が刊行され[るなど]4コマ漫画における革命児」と評されるほどである。植田は1947年に東京都世田谷区に生まれ、香川県で育った。1969年に中央大学を卒業後、1971年に「ちょんぼ君」（『週刊漫画 TIMES』）でデビューした。以来、4コマ漫画を中心に執筆活動をつづけている。その他の代表作として、「かりあげクン」（『漫画アクション』）、「フリテンくん」（『月刊まんがライフ』など）、「のんき君」（『週刊漫画 TIMES』）などがある。「コボちゃん」と「かりあげクン」はテレビアニメ化、「フリテンくん」は映画化、「のんき君」はドラマ化されている。主な受賞歴に、第28回文藝春秋漫画賞（1982年）「コボちゃん」で受賞した第28回日本漫画家協会賞優秀賞（1999年）がある。<sup>(19)</sup>

首相を描いた作品の分析に移ると、前述のように「コボちゃん」はきわめて家庭色が強い漫画で、安倍・福田首相の在任期間中わずか1本（作品総数711本）で福田を描いただけであった。頻度にするると0.14%である。安倍を描いた作品は皆無（356本中0本）であった。「ウチの場合は」（525本中1本＝安

倍首相)や後編で分析する予定の「ののちゃん」(709本中0本)と同様、時事・政治問題とはほぼ無縁の典型的な家庭漫画であることがわかる。

首相を題材とすることがほとんどないという点では、少なくとも小泉政権時以来、「純家庭的4コマ漫画」としての「コボちゃん」の作風は一貫している。先行研究によれば、5年5ヵ月に及んだ在任期間中、小泉を扱った作品は1,922本中わずか1本(0.05%)しかなかった。その作品(図10)については後述する。

福田首相を描いた唯一の作品にしても、政治性はほとんど見られない。2008年9月4日号の作品(No.9371、図9)がそれで、たわいのない家族の会話のきっかけとして、1コマ目に「首相辞任」を伝えるテレビ・ニュースを描いているにすぎない。

- ・「首相辞任…」と伝えるテレビを見たコボが、「辞任てなに？」と質問する(1コマ)
- ・祖母のミネが「自分からやめることよ」と答える(2コマ)
- ・「おじいちゃんも会社を辞任したの？」とコボが質問すると、祖父の岩男が「それはちょっとちがうな」と笑顔で答える(3コマ)
- ・ミネが「会社の場合は辞職よ」と説明すると、岩男は急に不機嫌になり「ちがう 勇退だ!!」と強く訂正する。2人のやりとりを見ていた母の早苗が、「日本語はむずかしい…」とつぶやく(4コマ)

1コマ目の「首相」が福田をさすことは、この作品が首相の突然の辞任表明(9月1日)からわずか3日後に掲載されていることから明らかである。



図9. 2008年9月4日号  
(No.9371)

このように、ごくまれに首相を描いても、政治性がほぼ皆無な家庭的な文脈でしか登場させないところに、先行研究がいう「純家庭的4コマ漫画」としての「コボちゃん」の特徴をあらためて確認することができる。「首相」が登場するのは1コマ目のみ、しかもテレビの報道内容を説明する文字として周辺の・付属的に描かれるだけである。そしてそれ以降、話題の中心は首相の辞任からまったくかけ離れ、家庭内の些細なもめごとに切り替わってしまう。「首相」はコボの家族に小さな話題を提供するきっかけとして登場するにすぎず、この作品から首相、あるいは首相の辞任表明に対する何らかの批評性・風刺性を看取することはできない。

ただし、同じく唐突に辞任表明をした安倍を取りあげていないことを考えれば、前任者につづいて福田が突然に辞任を表明したことが社会的な注目度を増幅させ、その結果として「コボちゃん」の題材になったと推測することができる。分析対象とした全4コマ漫画を総合すれば、頻度・作品数ともに、安倍のほうが福田よりも2倍近くも多く描かれている。にもかかわらず、「コボちゃん」では福田の辞任のみが扱われている。この逆転現象は、2人つづけて最高政治指導者が突然に辞任したことが、政治とほぼ無縁な「純家庭的4コマ漫画」でさえも取りあげるほど大きなニュースであったことを示唆している。実際に、福田を描いた11本の作品中、実に半数以上の6本(「コボちゃん」の1本を含む)が辞任表明に関連する内容であった。

事例が過少であることを承知であえて仮説を立てれば、「純家庭的4コマ漫画」である「コボちゃん」で首相が描かれるのは、政治とはまったく無縁の家庭でも話題にのぼるほど首相の言動が社会で注目され、大きなニュースとして（とくにテレビなどマス・メディアで）報道されている場合にほぼ限定されると考えられる。この仮説は、ほぼ同じパターンで小泉を描いた2001年4月27日号の作品（No.6761、図10）にもあてはまる。そこでは、小泉首相が誕生（就任日は前日の4月26日）したというテレビ報道が、やはり家庭内の会話のきっかけとして1コマ目で描かれている。福田とは違い、小泉は就任時の高支持率が大きなニュースとして報道され、「小泉フィーバー」とよばれた。その熱狂が、「コボちゃん」の題材となるほどに顕著な社会的現象になっていたと考えられる。その後の在任期間中、「コボちゃん」に小泉が登場することは1度もなかった。前述したように、同じ仮説は安倍首相を1度だけ描いた「ウチの場合は」にもあてはまる。もちろん、この仮説の妥当性は、さらなる事例研究を積みかさねて検証する必要がある。



図10. 2001年4月27日号  
(No.6761)



図11. 2008年9月9日号  
(No.9376)

関連して、図9（図10も同様）ではテレビで伝えられる首相を無名の一般庶民が見る・語る、という構図が採用されている点にも留意する必要がある。既述のとおり、この特徴は『毎日新聞』の「アサツテ君」と「ウチの場合は」にも共通して見られ、さらに後編で論じる「地球防衛家のヒトビト」（『朝日新聞』夕刊）にも認められる。時事性・風刺性の濃淡にかかわらず、市井の市民がマス・メディアを媒介して見知る存在として首相を描くのは、新聞4コマ漫画全体に見られる一般的特徴であるといえる。

追加的に、本論文の定義には合致しないものの首相と関連性があり、かつ上述の分析や仮説を補強する内容の作品が本論文の時間枠内に2本あったので、紹介しておく。

1つは2008年9月9日号の作品（No.9376、図11）で、福田首相の辞任表明を受け実施されることになった自民党総裁選（実質的に次の首相を決める選挙）が題材とされている。

- ・ 耕二が職場で2人の部下に「係長」と同時に話しかけられる（1コマ）
- ・ 2人が順番をゆずりあう（2コマ）
- ・ なおもゆずりあう2人に耕二が、「だいじょうぶ 二人ぐらいなら同時でもわかるよ」という（3コマ）
- ・ 自宅に戻った耕二が、「総裁選のゆくえは…」と伝えるテレビ・ニュースを見ながら、「うらの奥さんたらね…」と熱心に話す早苗に「ウンウン」と相づちを打つ（4コマ）

「総裁選」（4コマ）の「総裁」は福田をさしているわけではないので、この作品は本論文が定義する「首相を描いている作品」には含まれない。



図12. 2008年9月12日号  
(No.9379)

もう1本は、その3日後の2008年9月12日号に掲載された作品 (No.9379、図12) である。ここでも、福田の後継者が話題になっている。

- ・「つぎはだれがなりますかねー」という竹男に、耕二が「そりゃ王監督しかいないでしょ」と答える (1コマ)
- ・竹男が「いや野球の日本代表じゃなくて」というと、耕二は「すもうの理事長はきまったし...」とつばやく (2コマ)
- ・「あ! アメリカ大統領ね」とひらめく耕二に、「ちがうよコウジくん」「北朝鮮の後継者だよ」と岩男が助言すると、耕二は「あーハイハイ」と得心する (3~4コマ)
- ・質問の真意を理解してもらえない竹男は、「この家じゃ日本の首相はどこへいったの?」とあきれ顔でつばやく (4コマ)

会話の文脈から、竹男のいう「日本の首相」(4コマ) が福田ではなく、その後継者をさすことは明らかであるため、この作品も本論文が定義する「首相を描いている作品」には該当しない。<sup>(20)</sup>

定義には合致しないものの、上の2作品にも「コボちゃん」が首相を描く際に見られる2つの特徴を認めることができる。第1に、作品の中心はあくまで家庭内 (あるいは職場) のささやかな出来事であり、首相はその周辺の・付随的な存在でしかない。つまり、家庭色の強さに対し、政治色が極端に希薄である。第2に、政治とはほぼ無縁な家庭でも話題にのぼるほど首相 (この場合、次の首相は誰か) が社会的に注目され、テレビなどマス・メディアで大きく報道されている。その意味では現実の政治問題をある程度は反映しているといえるが、かといってそれが作品の主題となることはなく、中心はあくまで家庭での些細な出来事である。

以上の分析をまとめると、先行研究が「純家庭的4コマ漫画」と特徴づけた「コボちゃん」が首相を描くことはごくまれで、その場合でも非政治的な文脈に徹し、家庭や職場での些細な出来事に付随する話題・ニュースとして描くにすぎないことがわかった。そしてこの特徴は、小泉政権時から変わっていない。本論文の分析期間中、他の4コマ漫画で「コボちゃん」の首相描写にもっとも近いのは「ウチの場合は」である。政治家や政治問題が登場しにくいという点では、「ののちゃん」とも類似性がある。他方、旺盛な時事性・風刺性を見せる「アサツテ君」や「地球防衛家のヒトビト」とは対極に位置づけられる。

【注】

- (10) 作者の紹介や漫画の登場人物などについては、内藤麻里子「朝刊4コマ漫画『アサッテ君』おめでとう、きょう1万回」『毎日新聞』2003年11月5日などが参考になる。
- (11) 東海林の生い立ちや漫画家としての経歴については、東海林さだお『東海林さだお自選 なんたって「ショージ君」 東海林さだお入門』（文春文庫、2003年）などが参考になる。
- (12) 安倍を描いた8本は、以下の号に掲載されている。2006年9月29日号（No.10981）、2007年2月23日号（No.11123）、4月20日号（No.11178）、8月3日号（No.11281）、8月8日号（No.11286）、9月13日号（No.11303）、9月16日号（No.11306）、9月17日号（No.11307）。福田を描いた2本は、以下の号に掲載されている。2008年9月5日号（No.11632）、9月8日号（No.11635）。
- (13) 同じパターンに含まれるもう1本は2007年2月23日号（No.11123）の作品で、帰宅しても家族に相手にされない春男を、閣議で入室しても閣僚から起立してもらえない安倍首相になぞらえている。政治的風刺が皆無だとはいえないが、首相が直面している状況を家庭内の些事につなげてオチにしていることから、第1のパターンに含めるのが妥当であると判断した。
- (14) 2006年9月25日号（No.10977）の作品も、安倍の著書『美しい国へ』を非政治的なオチに使っている。この作品では本のタイトルだけでなく、表紙を飾る安倍の写真も描かれており、それだけを見れば「首相を描いている作品」といえるが、その翌日が首相就任日であるため、在任期間中の掲載という要件を満たすことができなかった。
- (15) 漫画の登場人物については、五十嵐英美「夕刊で好評連載『ウチの場合は』『大門さんち』を語る 森下さん」『毎日新聞』2002年2月22日夕刊、「夕刊連載4コママンガ『ウチの場合は』こんな人たちが大活躍」『毎日新聞』2003年6月24日夕刊、が参考になる。
- (16) 森下の最近の活動については、内藤麻里子「森下裕美さんが新作漫画『夜、海へ還るバス』」『毎日新聞』2008年6月11日夕刊が参考になる。
- (17) たとえば、2007年9月28日号の『週刊ポスト』の新聞広告には、「安倍乱心辞任！」・「官邸ひきこもり」・「麻生クーデター」といった言葉が使われている。
- (18) 五十嵐英美「夕刊で好評連載『ウチの場合は』『大門さんち』を語る 森下さん」『毎日新聞』2002年2月22日夕刊、内藤麻里子「日常の楽しさ描けたら 連載1年の『ウチの場合は』森下裕美さん」『毎日新聞』2002年12月26日夕刊。
- (19) 山口佐栄子「4コマ漫画」、夏目房之助・竹内オサム編・著『マンガ学入門』（ミネルヴァ書房、2009年）、12。
- (20) なお、福田首相の後継者を決める自民党総裁選に関する作品は、本論文で論じた「アサッテ君」と後編で分析する「地球防衛家のヒトビト」でも描かれており、4コマ漫画の題材になりやすい出来事であったといえる。「アサッテ君」は2008年9月15日号（No.11642）の作品、「地球防衛家のヒトビト」は2008年9月10日・12日・13日・19日号の作品が自民党総裁選を扱っている。ただし、いずれも本論文が定義する「首相を描いている作品」には含まれない。

【Abstract】

Prime Ministers Shinzo Abe and Yasuo Fukuda  
in Newspaper Comic Strips (Part 2):

An Analysis of Comic Strips in the Three Major National Newspapers in Japan 2006-2008

Takeya Mizuno and Tomomi Fukuda

This research attempts to analyze qualitatively (and partly quantitatively) how comic strips of the three major national newspapers in Japan, *Mainichi*, *Yomiuri*, and *Asahi*, in both morning and evening editions, portrayed Prime Ministers Shinzo Abe and Yasuo Fukuda during their tenures, from September 26, 2006 to September 26, 2007, and from September 26, 2007 to September 24, 2008, respectively.

As the second installment of a three-part series, this article (Part 2) analyzes qualitatively how *Mainichi*'s "Asatte Kun" (Mr. Day-after-Tomorrow), "Uchi no Baai ha" (In Case of our Family), and *Yomiuri*'s "Kobo Chan" (Little Kobo) depicted Prime Ministers Abe and Fukuda.